

## 論文

## 大木喬任と「天賦人權」

— 民法典論争における大木喬任の舌禍事件 —

重 松 優\*

## 目次

## はじめに

民法延期法案の貴族院審議

帝大総長と文部大臣の対立

国民主義者、谷干城と陸羯南の批判

教育界の反発

大木喬任の国家観

おわりに

## はじめに

御雇外国人ボアソナードが起草した民法をめぐる論争について、世上に最も知られている一節を挙げるならば、かの穂積八束が叫んだ「民法出でて忠孝亡ぶ」になるかと思われる。明治日本が近代化の道を突き進むなかで、移植された西欧の制度と日本固有の伝統慣習とのあいだには、必然的に様々な衝突が生じた。民法典論争も、こうした文化的相克のひとつと位置づけられよう。

論争の最大の山場となったのは、民法施行延期法案が提出された明治25年5月の貴族院だった。低調に終わった衆議院での審議に比べ、貴

族院では白熱した議論が戦わされた。討論は3日間に及び、3人の大臣が相次いで登壇、法典実施を強く主張した。普段は閑散としている傍聴席も、700を超える人であふれた。議場は採決が近づくにつれ騒然とし、議長は非常鈴を鳴らさねばならなかった。いずれも貴族院では未曾有の出来事だったという〔日本1892d〕。

その貴族院での論戦中、最も熱心に民法断行論を説いたひとりが、文部大臣大木喬任である。大木は明治6年に司法卿に就任して以来、十数年にわたって民法編纂事業の責任者をつとめた。司法省を離れたのちも、大木は明治法律学校名誉校員、法治協会初代会頭として、山田顕義と共にフランス法学派を牛耳る地位にあった。こうした関係から、大木は司法大臣田中不二麿より、貴族院での法典擁護を委嘱されたのである。

大木の発言は、過半が法典延期派への法解釈上の反論であった。ところが、大木に先立って演説し、民法と憲法の立法思想が矛盾していると主張した帝国大学総長加藤弘之に対して、「国家の主権のために人民の権利を動かし得るゝと云ふことがござりませうか…（中略）…。財産身体の保護上に於ては天然の道理に拠らざ

\* 早稲田大学大学院社会科学部研究科 博士後期課程3年

るを得ない、それから人民天然の道理を規定したので、是が普通の道理であります」と所感を述べた一言が、思わぬ波紋を呼ぶ。すなわち、かかる主張は「天賦人權説」であり、国体を否定するに等しいとされたのである。文部大臣の失言に、教育界からは非難の声が噴出した。そもそも大木は、司法省について文部省に長く関係し、このときは3度目の大臣だったほどだから、まさに足下をすくわれた形となったのである。

大木喬任の研究はいまだ十分に進んでおらず、この事件もまた然りである。憲法が公布されて3年、教育勅語が渙発されてわずかに2年しか経過していないこのとき、あるべき国体、国家像とは何か、国家と国民の関係は如何あるべきか、大木を中心としてどのような議論が戦わされたか考えたい。

資料引用に際しては、カタカナを適宜ひらがなに改め、句読点を付した。また、貴族院議事録の引用は、内閣官報局『帝国議会貴族院議事速記録』に拠り、「…」は原文をそのまま転記したものである。

### 民法延期法案の貴族院審議

明治25年5月26日にはじまった貴族院での法典論争において、大木喬任は26日と28日の二度にわたって登壇した。大木の「天賦人權説」は、初日の26日、先立って延期説を主張したドイツ学者加藤弘之への反論として現れる。議論の背景にある程度言及しながら、大木の発言にいたるまでの経緯をまず概説する。

26年1月に施行がせまりつつあったボアソナード民法の施行延期法案（具体的には商法と商法施行条例も含まれる）を貴族院に提出し、

説明のため最初の発言者となったのが、水産業の保護者としても知られる貴族院の名物男、村田保であった。イギリスとドイツに遊学した経験を持つ村田は、学派上もボアソナード民法と相容れない立場にあったが、民法草案の審議方法をめぐって司法大臣山田顕義と衝突する。明治23年2月、元老院民法委員会の席上で、「激働啼泣号哭」する村田と、「憤怒」にかられた山田顕義が激論を交わすという事件が起こり、それ以来、村田は民法延期派の中心的人物になっていた。村田は、法典延期法案提出に際して、常々160、70人ほどが出席するに過ぎない貴族院で、114人の法案賛成者を集めた。かれは、大正3年のシーメンス事件でも、山本権兵衛総理は天皇を欺き、海軍の腐敗を醸す大罪人だ、政治社会より葬るべく国民に代わって勧告すると叫び、内閣に引導を渡したほどだったから、政府からすれば相当に厄介な存在だったろう〔尾崎 1991: 363; 街頭社編輯局 1930: 254-260〕。

法典断行派も、法案通過を阻止すべく必死に運動を続けていたが、貴族院での審議開始前から、敗北はさけられない状況にあった〔箕作 1892; 磯部 1901〕。また、松方内閣は、第三議院に先立って敢行した選挙干渉に失敗して苦しい立場に立たされており、法典問題を重要事項として扱う余裕が無かった。内閣員が概ね冷淡であるなか、当事者である司法大臣田中不二麿、法典整備を条約改正の必要条件と考えていた外務大臣榎本武揚、そして長年民法編纂に携わった文部大臣大木喬任の3人だけが、民法断行を熱心に唱えていたという〔日本 1892b〕。（もうひとりの民法編纂責任者である山田顕義は、先年の大津事件で司法大臣を辞職してから

枢密顧問官の閑職についており、閣外から断行派の指揮をとっていた〔経国 1892〕。) 田中不二麿は、ひとりでは貴衆両院の対応が出来ないとして、大木に貴族院での演説を托す〔田中不二麿 1901〕。

明治25年5月26日の朝10時半、貴族院の開議が告げられ、村田保が法案説明のため演壇に登った。村田はまず、元老院での草案審議が「甚だ軽率」だったと述べてから、民法は倫常を紊ること、慣習に悖ること、法律の体裁を失すること、法理の貫徹せざること、他の法律と矛盾すること、以上法案理由書に掲げた5点について、具体的な条文を引きながら、その法典反対意見を明らかにした。それは、イギリス法学者たちがこのときまでに指摘した問題によく言及し、決して長くはないものの、明治22年以來の法典延期派の視点が整然とまとめられている。

村田に続いて、司法大臣田中不二麿、法律取調委員だった渡辺元が登壇し、いずれも民法断行説を唱えた。議事録上では、田中不二麿の演説は村田の4分の1にも満たず、おそらくは10分もせずに終わってしまったようである。田中は、法律は実施しなければその当否は判断できないとわずかに唱えるのみで、村田の主張に直接答えようとはしていない。おそらく大木が村田に反論すると踏まえて、手短な演説になったと思われる。

続いて、帝国大学総長加藤弘之が発言を求めた。加藤は明治10年に東京大学法理文学部総理、14年に全学の総理に任ぜられ、19年から4年間は元老院議員に転じたものの、23年から再度帝大総長に就任し、同年貴族院議員にも勅撰されていた。ドイツ学の泰斗として、明治期の

代表的な「御用学者」と加藤がいられていたことは、周知の通りである。

帝大総長の演説とあって、議場はあたかも学校のような雰囲気につつまれたという〔国民新聞 1892a〕。加藤はいう。人情風習の異なる日本にヨーロッパ流の民法を早急に実施するのは、よほど危ういことだと思っていた。ところが、

近頃又法学者の説を段々聞いてみますると危いと云ふどころのことではなくして一体の法典の土台が余程憲法と矛盾して居るであらうと云ふ考を起して来た。先づ憲法の矛盾して居ると云ふ所の唯大意より外に申すことは出来ませぬが、憲法の所で見ますると其精神を觀察して見ますと……憲法の精神を觀察して見るときには此の人民の権利と云ふものは凡て国家の主権と云ふものから許与せられて居る……許し与へられるものである。それで此人民の権利と云ふものが、公法上の権利私法上の権利も公私に依つて差別はありますけれども、其本源と云ふものは国家の主権……国家の主権と云ふものが大本になつてそれから許し与へられるものであると思はれる。憲法の精神は凡て日本人の権利は公権なり私権なりの別なく、凡て国家の主権から許し与へられて始て生ずる所のものであると思ふ。

加藤は、「私は…法学者ではありませぬから」、「素人考から考えた丈けの事であるから」、「細い箇条に至つて」は論じられないと明言は避けながらも、民法の精神は自然法を大本とし、そこから天賦の権利が人民に付与されると理由書に書いてある、と指摘する。「大土台」となる立法精神が異なるならば、その上の「建築」にあたる憲法と民法に矛盾が生じるのは必然だろう。天地間の万物には調和が必要で、「国家の生存」も、公法私法すべての法律が調和していなければ保つことができない。

加藤はさらに、天賦人權説そのものを非難する。

此自然法或は性法と云ふやうな人民の権利は天賦にあると云ふ説と云ふものは、固より欧羅巴でも一時随分盛んなことであつた。今日でもまだあるけれども今の欧羅巴の法学者の説を聞きましても権利と云ふものは国家あつて始めて生ずる、公の権利も私の権利も国家と云ふものがあつて始めて生ずるものであると云ふのが近頃は欧羅巴でも段々勢力を得て居る、其方では決して人間の自然法性法に云ふやうな天然の権利と云ふものがあることは云はない。国家あつて始めて権利あると云ふ即ち国家の主権から生まれる権利である、凡ての権利が……其外欧羅巴でも段々盛んなるやうに思ひますし、さうして私も固よりそれを信ずる。

端的に言えば、フランス法学は時代遅れだ、というのである。

発言の終わりにいたって、加藤はいささか口調を強めて、民法と憲法の土台が異なっていることは「断言」してもよい、実施後に当否を見極めて改正するなどという「小刀細工」は「決して」通用しないといった。徳富蘇峰の国民新聞は、加藤の演説をこのように評している。「最後に法典は天賦人權説より来りたるものなれば寧ろ其根本より改めざるべからずと論結せられたるときは氏の旧著人權新説を思ひ合されて今昔の感多少」と[国民新聞 1892a]。

## 帝大総長と文部大臣の対立

加藤弘之が明治15年に発表した『人權新説』は、加藤の「転向」を象徴する著述である。加藤は進化論を軸とする新しい社会観を示すとともに、旧来信奉してきた天賦人權説は妄想に由来する危険説だったとして、自著数編をみずから絶版にした。それまで政府寄りの主張をしめすことがあったにしろ、開明思想の旗手として知られていた東大総理の変節は、明治思想史上

の一大スキャンダルとなる。民法典論争においては、これまでも民法が他の法律と抵触する可能性が、しばしば反対派によって指摘されてきた。ただ、かかる経歴を持つ帝大総長が、憲法を持ち出して論じたところに、加藤演説の出色たる所以があったといえよう。

昼の休憩をはさんで、保守党中正派を率いる退役陸軍中将、鳥尾小弥太が登壇した。鳥尾は2年前の商法典論争に際しては延期説、25年になって法典断行派に転じた変わり種で、政府から司法大臣の椅子が約束されたとささやかれていた[重松 2004]。

鳥尾は、「余りむづかしいことばかり言つて居りましたならば、遂に（筆者注、民商法の）成立は出来ますまい」と村田の主張を駁してから、加藤の国家主義を批判する。

成程国に対したる所の権利、国に対したる所の義務と云ふものは主権に依つて即ち与へられ又主権に依つて指示されてあるである。が相互間に争論が起つたのはそれなどは一々どうも主権から与へられ主権から奪はれると云ふ様なことに至つては随分是れは変なことであらうと私は思ふ。で民法や何かと云ふものは多くは人民相互の上に起る所の事柄が大部を占めて居るものに相違ない…（中略）…

人間と云ふものは一種の動物で唯だ猿みた様なものであると云ふ鑑定を付けると云ふことは、昔から心あるものはしなかつた。人間はどこまでも一正の人間である、其人間がま一天然の権利と云ふことは西洋では言ふか知らぬが人間たるべきものは言葉を換へて言へば権利あるものでせう。それを余りひどく扱つたり奪ふたりひどい目にしますと云ふと、之を昔から国君がすれば暴君、政をすれば之を暴政と云ふ。

何も人間はどうしても構はぬ、人間の権利義務は主権から付けられたものであると云ふならば暴も不暴もあるものではない。斯様なことは西洋の何学から出たことか知りませぬけれども、皆人は人たる所

の権利義務は自らある。天から来たか地から湧いたか知らぬがさう云ふものがある。

したがって加藤の説は、「鳥尾一家の学に於ては甚だ不都合である」と「断定」した。

ここにおいてようやく大木喬任が登場する。大木は演壇に登り、議場を見まわし「コホンと大呼」して傍聴人の肝をつぶしてから、おもむろに村田保の批判をはじめた[国民新聞1892a]。村田が持ち出した自然義務、家督相続、占有権などについての非難は、「一として価値」がない。裁判を行なわなければならないという現実の必要、今日社会の変化を考えれば、村田の主張は机上の空論に過ぎず、民法制定はまさに急務である。後見人のほかに後見監督人、親属会議を定めよと民法にあるのは、庶民には迷惑千万だとする村田に対して、

村田君は華族様方には斯様なことが出来やうが或は土百姓には出来やうかと言はれたが、知らず土百姓は木の股から生れましたか。親も子も無いかと御覧なされたか知れぬが親もあれば兄弟もある。それに親属会議はテーブルの上に登つて立派な弁当でも食はぬと親属会議は出来ぬと思つて居る御考と思ふ。左様な間違つたことを此議場に持出さるべきものではないと本官は存じます。

と応えたところなどは、その議論が当を得ていたかは別として、ユーモアを交えた余裕さえ感じられる。そして、返す刀で大木は加藤も攻撃する。

又先刻加藤君が申されましたことも誠に聴づらうと云ふことを私は感触を起しました。然るに鳥尾君が其方は餘程弁駁になりましたから本官は申上げませぬが、国家の主権のために人民の権利を動かし得らるゝと云ふことがござりませうか。独逸にさう云ふことがござりませうか。国家の主権のために……人民は各個各個の権利で決して財産身体の保護上に

於きましては則ち天然の道理に拠らざるを得ない、それから人民天然の道理を規定したもので、是が普通の道理であります。それ故に外国に対しても交通が出来るのでござります。然るを国家のために権利を折らるゝと云ふやうなことであれば、人民が国家の奴隷と云ふものであるが、さう云ふ道理のもので無い。なんぼ独逸でも日本でも左様なものではない。それ故に裁判が左様なことになれば畠山重忠板倉周防守か……それは加藤君一人で悉くあると云ふ訳には行かない。併ながら独逸国に左様なことがあると云ふやうな御感触では甚だ驚入つたことであります(傍点筆者)

大木は演説の最後、村田に向かって、きっと今も反論があるだろうから「本官は公用を除くの外、夜でも昼でもいつでも宜しいから本官が御相手になつて答弁を致しますから御出を願ひます」と「一層大声」で告げてから演壇を降りた。

法典断行派の一部には、日ごろ口下手だった大木が堂々の演説をしたことは、実に心強く感じられたものらしい。司法官曲木如長は、「あの時分には大臣が自から出て説明をすると云ふ事はなかったが大將は自から出馬をしてやつた、弁舌と申し、理屈と申し、能くすらすらとやられた」といっている[曲木1901]。また、世間一般にとっても、ひとつの驚きとして受け取られたようである。法典反対派の新聞に皮肉な記事が掲載されぬではなかったものの、「大木大臣登壇し…熱心に手を挙げ水呑コップを動かして駁撃をなし…伯が演説は意気甚だ切迫して言辞に尽す能はざるものゝ如く熱情満場に溢れたり」(朝野新聞)、「大木伯の熱心は別段にて一延期論者壇を下る毎に忽ち要須を取りて之を罵倒し其勇氣中々老余の人とは思はれず」(横浜毎日新聞)と報じられた。ただ、2日後に再度登壇しての演説は、早口のうえ声が通ら

ず、「然り而して」という口癖が議場の失笑をよび、概して不評であった。このとき、名指しで批判を受けた富井政章は、最初片耳に手をあてて演説を聞いていたが、ついには両手をあてて象の真似事をせねばならなかった[国民新聞 1892b]。

## 国民主義者、谷干城と陸羯南の批判

初日の討論は、大木に引き続いて、外務大臣榎本武揚、民法起草者のひとりだった箕作麟祥が断行論を演説し、午後4時15分、延会が告げられた。翌27日、最初に登壇したのが谷干城である。西南戦争において熊本城を守りぬいた名将としてしられる谷干城は、第一次伊藤内閣の農商務大臣に就任するが、条約改正問題をめぐって辞任、それからは主に保守的な立場から政府を批判し、貴族院に一定の勢力を保っていた。議場で大木の「天賦人權説」に異論を唱えるのは、谷干城がはじめてとなる。

なお、大木はこの日、午後になって大臣席につき、谷の演説のあいだは議場に居なかったものらしい。

谷は、文部大臣である大木が、ボアソナード民法と倫理名教上の問題について発言するだろうと期待していたが、豈にはからんや「司法大臣の代言」ともいべき法律論に終始したので「甚だ失望」したという。そして、次のように批判を続けた。

それから天賦人權云々の議論がありましたが、是れはどうも大木さんが間違つちやらうと思ふ。今日は鳥尾君が来て居るが大木君も鳥尾君もわれわれと  
(ママ)  
同じ漢学主義の人であつてそれから成立つた人で、中庸にある天の命之を性と謂ひ性に率ふ之を道と謂ひ道を修る之を教えと謂ふ、天命に則り性法に

率ふと云ふ、斯う云ふ所から来た人道論で決して西洋で謂ふ人權論から来たのでは無からうと思ひます。是れは其方の……人間の本分と云ふ所であらうと思ふ。是は人權論の誤解ぢやらうと思ふ。それで大木さんの御論は一向何であつたか我々に分らなかつた。

谷干城の演説は、同じ思想傾向を持つものとして、大木の主張への違和感を指摘するにとどまった。ところが翌日の28日、谷から財政支援を受ける陸羯南の新聞『日本』は、「天賦人權、大木伯」と題して、大木批判を社説欄に大きく取り上げる。

明治中期に勃興するナショナリズムの旗手として、陸羯南は今日も高く評価される人物である。陸は司法省法学校で学んだ経験があり(学校運営に反発して3年で退学した)、フランス語にも堪能で、法典断行派に与しても不思議ではない経歴を有していたが、彼の保守的傾向はそれを許さなかった。民法典論争がはじまった明治22年春頃から、陸は法典問題をいくたびか取りあげ、新法の様々な問題を批判し、国民はもっと関心をもたねばならぬと説いた。陸は「天賦人權、大木伯」に並行して、27日から28日まで「法典是耶非」の社説を掲げる。そこで陸は、ボアソナード民法が慣習風俗を相当に取り入れていると認めるものの、「規定ニ反対ノ慣習アルトキハ其慣習ニ従フコトヲ妨ゲズ」などの条項が頻出し、慣習の調査検討が十分であること、慣習の扱いに一定の基準がみられず不文法と成文法の混乱がみられることから、法理學上において「不完全」な法典として、実施延期を説いた[日本 1892a]。

「天賦人權、大木伯」の趣旨も、同様に法論理上の矛盾をつく。陸のみるところ、大木は私権と公権は別物であり、私法は国家大権の作

用と関係する必要はなく、財産保護においては「天然の道理」によらざるを得ないと主張している。大木のいう「天然の道理」は「正理直道」の意味であろうが（この評価は谷の意見を踏襲したらしい）、現実の法典は慣習や特別法を多々参照し、公権と深い関係にあり、道理のみで規定されてはいないではないか。

さらに陸は興味深い指摘をしている。加藤弘之はドイツ主義、大木喬任はフランス主義を特徴とするが、それは文部省における相対的な位置を示すにとどまり、彼らは真正のドイツ思想、フランス思想を理解していないというのである〔日本 1892c〕。

国家の主権に歴史上の重きを置くは独逸主義に於て之あるも、国家ありて而後に権利ありと云ふ説は、恐らくは独国法理の是認する所にあらじ。一切の法律（原注、憲法も）宇宙自然の道理に近か寄らしむるは仏国主義に於て之れあるも夫の大木伯の説の如く、独り私法のみ天然の道理に拠りて規定すとは、是れ又た仏国の法理にあらじ。

つまり、私法のみ天賦人權の考えを適用しようという大木の主張は、御都合主義だと陸は主張したのである。

しかし、大木は自説をまげる意思はなかったらしい。27日朝にも、朝比奈知泉の東京日日新聞、関直彦の東京新報などが、大木発言をとりあげ、それに批判的な短評を加えていた。その日の最後に演説をした富井政章も、「基盤となつてゐる考が古い、昨日出ました自然法と云ふ考、天賦人權と云ふ考えは今日の学問上から見れば全く歴史上の遺物である、既に18世紀の夢と消えた考である」と喝破した。法案審議最終日となる28日、富井政章に反論するため、もう一度演壇にのぼった大木は、非難を受けること

は明らかでありながら、わざわざ話を蒸し返した。

扱又妙な問題が世間に湧出しまして、国家主義とか個人主義とか云ふ様なことが民法中にあらうやうなことは少しも思ふて居りませぬことでしたが、実に其意を得ませぬやうな問題が起りましたが、先日加藤君の話しでございました。是は一寸一撃を致しました所が昨日もどうか富井君もさう云ふことを言はれた様に存じましたから、此国家主義と個人主義と云ふ事の弁解をいたします。

どうぞございませう、此今の諸君は人民の権利と云ふものは国家から得らるゝものと御考へなさるか。決して左様ではございますまい。若し人民の権利が国家から得らるゝものと見たならば、即ち国家より如何なることを致しても人民は致方がないと云ふ結局になりませう。又左様な事で各国共通することが出来ませうか。夫故に本官が即ち此国家と云ふものは固より人民を統治する所の国家でございすけれども、併ながら人民と云ふものは天賦の権利あることを認めざるを得ぬではございませぬか。…（中略）…

民法とか商法とか云ふものはどうかと申しますと、世界共通する所の道理に依らざるを得ませぬ。左もなくば今日交通も出来ず何もすることは出来ず、其の共通する所の原則を申して見ますれば学者諸君は皆御承知でありませう。人を害する勿れと云ふのが原則で、人に借りたる金は返さなければならぬ、品物を買ふたなら代金を払はなければならぬと云ふ原則に外なりませぬ。是が私法と云ふことであります。是は天賦の権利と申さざるを得ませぬ。

然りと雖も国家の必要と感じましたときは、国家は幾多の制限を用ひまして、是は公益のために制限することもございます。…（中略）…今日の民法はどうございますか、民法中に幾らもあります、沢山公益のために規定したものが数百条ございます。…（中略）…併しながら是れ等の事ばかりで、即ち明治8年103号の布告を云ふものは皆御承知でございませう。是れはどうかと申しますれば、成文のあるものは成文に依り成文なきものは慣習に依り慣習なきものは条理を推考して裁判する云ふ事はどうぞござり

ます。此の条理と云ふのは即ち人民の権利……人民の天賦の権利を認めた話ではござりませぬか。是れ等の事と申すものは決して人民の権利を認めぬで済みませうか。

如何様富井君は万国公法を御承知でござりませう。万国公法で申す所の事はどうして今規定致しまするか。即ち天理に依る所の事と実例に依るより外万国公法で断ずることは出来ませぬ。夫れ故に国家の法律は国家其の物が丸くとも角なりともするのが国家の法律でござります。併しながら民法商法と云ふ様な人民互ひのことは普通の道理に依らざるを得ぬと云ふのが、動かすべからざる道理でござります

## 教育界の反発

谷干城と陸羯南、いずれも大木の発言に反応するのは早かったが、その批判は多くの法典延期説にみられる主張、倫常の危機を訴えるヒステリックな声と、大きく趣を異にしていた。かれらは大木の「天賦人權説」を、あくまでフランス法理をめぐる誤解として捉えた。陸は、天賦人權説と文部大臣の職掌が、実務において抵触することは考えられるが、原則として法典と文教政策に関係があつてはならない、「法律は法律なり道德と関係なし、裁判は裁判なり教育と関係なし」と説く[日本 1892c]。しかし、他ならぬ教育界から、文部大臣が危険思想を唱道しているとして、声高に大木を難詰する声がありはじめたのである。

明治20年代の有力教育雑誌には、『大日本教育会雑誌』、『教育時論』、『教育報知』、『国家教育』があつた[上沼 1986: 38]。そして4誌ともに、教育に直結する重大問題として、法典論争に注目する。『教育時論』は、イギリス法学派の主張を紹介し、「吾等は、法律家にはあらざれども、其大意に就ては、最も同意賛成を表するものなり」と評した[教育時論 1892]。文部

次官辻新次が会長をつとめる大日本教育会は、法典問題の決着がすでについた6月下旬、杉浦重剛の発議により「法典と倫理の関係取調委員会」を設けて、甲乙二説の報告書を受けた。9月にいたり、民法は倫理に抵触する点が無きにしもあらずとの主張を賛成多数で決議している[手塚 1948]。

法典問題のみならず、大木発言をとりあげて激しい非難を加えたのが、『教育報知』と『国家教育』である。『教育報知』は教育評論家日下部三之介の主宰にかかり、『国家教育』は元文部省参事官伊沢修二を社長とする国家教育社の機関誌であつた。『教育報知』と『国家教育』はともに、それまで国家教育主義者と頼んでいた大木が、突然に「天賦人權説」を唱えたことに驚き、大木に釈明を要求した。両誌の論説は多く重複するところがあるので、文部官僚として大木に接した経験があり、また独自の民法論を展開した伊沢修二の議論を、ここでとりあげたい[伊沢 1892a]。

吾輩が国家教育を以て任ずる諸君に向ひ、泣を飲(それ)て報ぜざるを得ざる事こそ出で来りたれ。開は、他に非ず。彼法典延期問題の討議中、天賦人權説を唱道して止まざりしは、実に目下教育の大局に当り、全国の教育者が、日常敬長せる大木伯爵其人なりき。聞く大木伯は、沈毅寡言の人なりと。然るに今回の貴族院に於ける演説は、頻多にして、且甚だ長かりき。又聞く大木伯は、学識に富み、国体を重ずるの人なりと。然るに彼天賦人權説は、我国体と相容るべきものなるか、我国史の明示せる所に背かざるか。

伊沢修二と大木喬任に直接的な接触が生まれたのは、明治16年12月から18年12月まで、大木が2度目の文部卿をつとめた時期である。このとき伊沢は文部省編集局副長を兼務していた。



大木は、修身の教科書は大臣たる自分が筆をとる、「国体や倫理の事」を「能く調べてある」といい、編集局に自分の机を据えさせるほどだった。（これは結局多忙のため、実現せずに終わっている。）ところが、「終始此の国体論の精神を忘れず」にいた大木が、民法を擁護するに限って「却て其の反対なる天賦人權論を振りまはす」に及んだので、短気な性格の伊沢は激昂した[伊沢 1901]。

伊沢は加藤弘之と同様の主張を、さらに過激な言葉で繰り返す。天賦人權説は、フランス帝政を転覆し、国家を破滅させた「根拠なき妄想に出でたる…百害あるも一益なき邪説」である。これがわが国に行われなかったのは喜ぶべきことだが、これまで国体の観点から排撃が試みられなかったのは遺憾千万である。では日本の国体とは何か。ここにおいて、伊沢は穂積八束の上を行く程の、極端な国家観を揭示する。[伊沢 1892a]。

それ我国は、天祖の開かせ給へる国にして其国土人民は、皆皇室の御所有なりしこと、遠く之を神代の史に徴すれば、天祖の神勅に、

葦原千五百秋之瑞穂国、是吾子孫可王之地也。

とあるにより、其証、炳として火を見るが如く、一点の疑なき所ならずや。又近く今日明治の世に在りても、薩長二藩が、唱首となり、肥前土佐も之に次ぎ、藩主連署上表して、封土人民を奉還したる事実を徴するも、我人民の土地其他の所有權は、彼空漠たる理論に謂ふ所の、天賦人權に依りて得たるものに非ずして、我国父と仰ぎ奉る 天皇陛下より賜与せられしものなること、一言半句を費さずして明ならん。

斯る看易き道理を外にして、天賦人權説を唱へらるゝ人の心事ほど、解し難きものはなし。元と大木伯は、肥前藩の人なりと聞けば、版籍奉還の当時、其議に与かりしことはあらざるか。吾輩は、昔日の

民平氏は、今日の伯爵なることを信ずるものなり。願くは吾輩が、誠意誠心を以て陳ぶる所を聴納し、一辺の高教を垂れ、以て教育界の針路を誤らざらしめよ。

伊沢の大木批判には後日談がある[伊沢 1901]。

それから取敢へず拙者は国家教育雑誌で非常に大木攻撃を初めた、随分ひどく無遠慮にやつた、すると大木さんは之を見たらしい、と云ふものは、其後に至り大木執事から、当邸に於ては自今以後国家教育雑誌は不用に付配達方相断へき旨を通知してきた、…（中略）…元来司法大臣として職務上かく天賦人權論を持出されしは余義なき事とした処で、平生は国家論をやり、国体主義の人であるのに斯る反対なる（原注、平生自論に）演説をなされたから、拙者も思切つて、有らん限りの筆力を振つて其の攻撃に向つたのである。

国家教育社の定会にも、これから先、大木からの祝辞が寄せられなくなったようだから、大木の方も伊沢によほど立腹していたらしい。

では、伊沢のいう「国体論」、また自らの雑誌の名としても掲げた「国家教育」とは果たしてなんだったのであろうか。そしてそれは、大木喬任自身が持っていた国家観と、どのような関係にあるのだろうか。概略を述べれば、以下の通りである。

明治維新と共に始まった近代化政策、それにとまなう牧歌的な西洋文明の賛美は、教育政策にも大きく影響を及ぼしていた。明治4年7月から6年4月まで、大木喬任は初代文部卿として教育制度の制定に尽力したが、5年8月の発布にかかる「学制」は、制度形式はフランスを、教育内容はアメリカを模範とした。沢柳政太郎は当時を回顧して、「大木文部卿は、漢学者で其方の造詣頗る深く、何処やら茫つとした、大きなタイプの人であつたが、元来が非常

な欧化主義者で、当時米人スコットを聘して師範教育の創立に当たさせたが、何もかも悉く米国でやる通りの事をやれといふ調子であつた」としている[井上 1987: 37; 国民教育奨励会 1922: 図解 1]。

たとえば明治初年の修身教育がどのようなであったかという点、教科書として採用された『勸善訓蒙』、『修身論』、『性法略』などは、いずれも翻訳書で、「宇宙の万物を創造したるは皆天による。故に人、造物の主あることを信ぜざるべからず」と、キリスト教の教義がそのまま残されているほどだった。『性法略』に至っては法律書である。法律書なら何でもよからうというので、箕作麟祥が翻訳したフランス民法を修身教科書に代用した県が10を超えていたという[国民教育奨励会 1922: 151-153]。

これらの高揚した欧化主義は、明治13年12月の改正教育令、また明治14年、侍講元田永孚による修身書『幼學綱要』の刊行などによって、明治10年代の中頃から次第に掣肘されていく。しかし、名教の根本に国体を置き、国家富強を大目標として教育を統制するという考えが本格的に現れるのは、明治18年12月、森有礼が文部大臣に就任してからのことである。

明治20年夏、森有礼は全国の学校を開放し、17歳より27歳の男子国民に「一日に一度、或は二度時間を限り」徳育をほどこし体操練兵の初歩を学ばせるといふ発案をして、法制局御用掛井上毅に意見書を起草させた。その意見書にいわく、現今の教育にはいまだ標準がなく、日本人の過半は開進の風に欠け、立国の何たるかを理解していない。欧米人が愛国心に富み、団結して国家危難にあたっているのは、人民を教化する力によるものであって、「有礼不肖思念し

て此に至る毎に三嘆痛息」せざるを得ない。

顧るに我国万世一王、天地と与に限極なく、上古以来威武の輝く所、未だ曾て一たびも外国の屈辱を受けたることあらず。而して人民護国の精神、忠武恭順の風は、亦祖宗以来の漸磨の陶冶する所、未だ地に墮るに至らず。是即ち一国富強の基を成すが為に無二の資本、至大の宝源にして以て人民の品性を進め教育の準的を達するに於て他に求むることを仮らざるべきものなり。

この意見書執筆については、森有礼が刺殺されて間もない明治22年4月、起草者井上毅が、皇典講究所講演で以下のように語っている。

意見書の主意は、概略を申せば国体教育の主義である。思ふに森子が教育事務の委任を受けて以来、だんだん苦慮を廻らされて、始めて帰一する所の方法を執られたものと見える。抑々、教育と云ふことは、教科書を並べて事物を知らすと云ふことに止まらない。一般国民の心を確め、精神上の方向を指示し、一の重点に帰向せしむることが最重要なることである…(中略) …

幸にして我国には万国に類ない所の優美なる国産がある。そは何ぞといふに外でない。即ち御国の国体、万世一系の一事である。此一事より外に教育の基とすべきものはない。御国の人民たる者は、遠ひ祖先より子孫の末に至るまで、千代に八千代に御国の国土のあらん限、万世一系の天子に侍づき奉て居ると云ふことは、実に各国に比類のないことで、御国に限つて、難有国体である。此国の成立を以て教の基礎とすることが、教育上第一の主義とすべきことである。之を棄て他に依るべきものはないと云ふが、森子の第一の意見であった。

井上はいう。「国体教育主義を實際に用ゐんとしたるは、故文部大臣森子を以て初めとしなければならぬ故、国体教育主義の為には、森子の不幸は惜むも尚余りある事であります」[文部省内教育史編纂委員会 1-37]。

こうした思想はまもなく井上の手によって、明治23年の教育勅語において結晶化されることになる。伊沢修二をはじめとする教育関係者が信奉していたのも、森有礼を嚆矢とする国体教育であった<sup>(1)</sup>。伊沢は森によく用いられた。明治19年、枢密院議長に転出した大木の後を襲って、森有礼が文部大臣となる。当時の文部省編集局は、西村茂樹を局長として、学者たちが古事類苑などの編纂にあたっていた。文部省の手で教科書を編纂せんと企図した森は、西村茂樹以下の局員をほとんど退け、編集局副長の伊沢を局長に抜擢した[湯本 1912; 国民教育奨励会 1922: 105-116]。伊沢は森の庇護のもと、わが国はじめての国定教科書を完成に導く。しかし、憲法が公布される明治22年2月11日の朝、森有礼は暗殺者の凶刃に倒れた。あらたに文部大臣となった榎本武揚によって編集局は廃止され、伊沢は閑職である参事官とされた。そして公務のかたわら、森の弔い合戦として立ち上げたのが、国家教育社であったのだ。24年6月、3度目の文部大臣に就任した大木の披露の席で、伊沢は日頃から不仲だった文部次官辻信二と取っ組み合いの大喧嘩をして非職を命じられ、翌日辞表を提出した。伊沢は私怨から自説をどうこうする人物ではなかったようだが<sup>(2)</sup>、こうした顛末は触れざるを得ないかと思う。

### 大木喬任の国家観

明治25年6月、松方内閣は総辞職し、大木喬任は文部省を去り、枢密院議長に転任する。11月、教科書検定の機密書類が大木のもとから漏洩するという事件が起こり、大木は引責辞任をせまられた。大木はそのまま政界から引退し、結局伊沢に返答することはなかったのである

[伊沢 1892b]。したがって、大木の「天賦人權説」を評価するにあたっては、いくつか他の資料から補いながら、考えてゆかねばならない。

「天賦人權」という概念が、原語の“droit naturel”から翻訳されるに際して、今日の「自然」に相当する語がなかったために、「天から与えられた」という表現が選ばれたこと、儒教思想の「天」の概念が混淆し、日本独特の解釈が生まれた経緯については、すでにいくつかの研究によって明らかにされている[森 1976; 松本 1979; 中川1985]。谷干城が、大木を漢学者である、大木の主張はフランスの人権説よりも、中庸の人道論に近いと指摘したことは、ある程度、正鵠を射たように思われる。

伊沢修二が文部省編集局副長だったとき、大木が修身教科書を自ら執筆しようとして果たさなかったことは前述した。このころ、佐賀で小学校設立を計画した鍋島侯爵家家扶、深川亮三に宛てて大木が書いた書翰の下書が、憲政資料室大木文書に残っている[大木 1885]。

初学の輩尤も不諳る不可ものは修身の書なり、修身書中諸の反訳書のごときは其数日々増加せりと雖も我邦教道の基礎となすに不足るにより幼童輩をして専ら之を以てのみ其心志を定むるは不可不慎、然即何を挙て可ならんか、德行志操礼儀廉恥より所謂人倫大本を明示するは小学の書に超るものなし、殊に口義詳解なる者は其解釈鮮明にして…(中略)…其益たるや実に博し、之を万卷中の華とするも可なり

『小学』は朱子が門弟に編纂を命じたとされる児童向けの教育書で、『口義詳解』は江戸中期の周防岩国の学者、宇都宮逯菴による注釈書『小学句読口義詳解』であるらしい。大木は郷里に建学される予定の学校で、両書が採用され

るよう深川へ懇切に依頼している。大木が文部大臣に再任した明治24年においても、大木のおかげで漢学者が息を吹き返してきた、と報じられたほどだった。大木は確かに、徳育をはじめとする国家政策において、儒教主義を、非常に重視していたのである。

しかし、公法と私法は別個の論理に基づいている、私法上の人民の権利は、国家から与えられるものではなく、人民が生来持ち合わせているのだ、という大木の主張は、儒教主義、あるいはフランス主義という狭い枠にとどまる性質のものではなかったのではなかろうか。なぜなら、伊藤博文も後年に到り、憲法解釈をめぐって類似する意見を述べているからである[伊藤1928: 直話194-195]。

漢学者などが、とかく誤解してゐることであつて、何でも専制的のことでなければ、日本の国体に適はぬが如く思うてゐるが、これは大なる誤解である。例へば支那流儀で云つても、また日本の古来の学問的に云つても、国土と云ふものは王家のものである。所謂普天の下率土の浜、王土王臣に非ざるはなしと云ふ、此の大原則に憲法政治は適はぬように心得てゐるのであるが、これは誠に彼等の限界が狭小で、また古今の政治と、その実体とを解することができないから、斯様なことを云ふのである。いくら率土の浜は王土ならざるなし、王臣ならざるはなしと云ふことに異論はないとしても、これを自由勝手に与奪すると云ふことになつたならば、人民は手足を置くに處なしと云ふことになるではないか。それ故に趣意は王土王臣にあらざるなしで些とも差支えないが、併しながら彼の物は彼の物、我の物は我の物とし、若し人が彼の物を奪ふ時にはどうするか。そんな乱暴なことは決してさせぬと云ふ保証、即ち生命財産を法律の下に保護することにしなければ、国家の安寧秩序は保たれぬ。この保証が無ければ、専制と云はんよりはむしろ暴政と云はなければならぬ。是に於て憲法政治の必要が起るのである。

原則論としては、伊藤は国家が個々人の権利を保証するという立場を崩していない。しかし、国家が人民の財産生命を奪うことは許されない、古典的な王土王臣論は今日とられるべきではないという主張は、伊沢修二より大木、鳥尾の貴族院での発言と、より強く共鳴する。伊沢等の大木批判は、伊藤の目をして、ファナティズムとされるだろう。

国体を尊重するにおいては、大木喬任は決して人後に落ちることはなかった。明治10年代初頭、来るべき憲法はどう編纂されるべきかという問題に当時の参議たちが意見書を著したなか、大木が提出した意見書は「乞定国体疏（国体を定むるの乞うの疏）」と題され、「数千歳の前に定る」国体の所以を明らかにして、憲法制定の礎にせんと主張するものだった[大木1881]。しかし、その国体の解釈には、独自の視点がみられる。

皇邦建国の体、之（筆者注、欧米の諸例）に異り、天祖詔を垂れ、天孫降臨す、是に於てか民に定君あり。而して君民の分判る。蓋し天孫の降臨固より民の爲めにする所以の義に外ならずと雖も、然れども民の得て而して私する所に非ざるなり。即ち是天の明命のみ。是を意て天位無窮の詔日星に並て而して明かに、天安河の議海岳と共にして而して著し。是れ天祖天孫万世の上に在て万世の下を知り預め国を治め民を安ずる所以の基、其覬覦を絶ち、その民志を一にし以て紛擾の源を防ぎ、以て禍乱の階を塞ぐに在るを慮りて也。故に天位の一系は偶然に非ざるなり。陛下之を列聖聖皇に受け、列聖聖皇之を天祖天孫に受く。然れば即ち天祖の遺詔、安河の議即ち皇邦建国の基礎たり。（傍点筆者）

天の安河とは、高天原の中心を流れる川である。その河原は、スサノオがアマテラスに邪心なきを証して天界にとどまる許しを得、またア

マテラスが天岩戸に隠れた時には、八百万の神々が参集して衆議をこらしたと場所とされている。大木は、議会を開設し国民に自由を与える根拠をも、「天の安河の議」以来の歴史的背景に位置づけようとした。こうした復古的ともいべき論法は、天祖神勅に日本の国土人民は天皇が所有するとあるではないか、と主張した伊沢修二に通じるところがある。しかし、建国神話を、伊沢が天皇専制を正当化する論拠とした一方、大木が開明的な方向に国史と伝統の再解釈を試みていたことは、両者の国家観に相当な違いがあったことを示すものだろう。

森や伊沢の国体論においては、欧米の新知識、旧来の儒教的道徳など、あらゆるものは国体を頂点にいただき、国家を富強に導くための手段とされていた[田中 1890]。大木の国家観は、晩年の著述『進行論』に窺えるが、大木が最も重視したのは、善と幸福の追求であった[大木 年不明]。個人が生を全うするには、国家や歴史、国体が不可欠であるけれども、それらはあくまで人類の「進行」を助ける存在と位置づけられている。

とはいえ、大木が進歩的な人物だったと、安易に結論することもできない。明治24年12月、民法典論争と同じ時期に、大木は文部大臣として教育の趣旨について演説をしたが、そこでは「臣民たる責務を尽すは人道中最も必要の事にして…教育上此責務を尽すの事を教示するは国民教育の要旨なるべし」と説いた[大木 1891]。さらに同じ頃、熊本英学校の教師が「眼中国家なし」と発言したと誤報が伝えられ、熊本英学校は私立学校であるのに、熊本知事松平正直がその教師の解雇命令を出すという事件がおこった。不当を訴えるため上京した同僚田中賢道が

大木に面会するも、

大木伯は開口第一に拙者は貴下の所説に大反対なり、拙者は松平知事が発せし命令は失当なりと認めず、仮令ひ亦失当なりと認めるものあるも目下我国の制度の下にて在上の命ずる所に抗抵する権利は人民にあるべきことを認めず

といい、「仏国の人権説など異例に持ち出し」たという。つまり、ルソー流の人権説を、少なくとも現行の制度には相容れないと否定したのだった。「政権濫用」、「臣民として権利を全くする為めには身を犠牲にしても断じて此の濫用に出でたる命令に服従する能はず」とする田中と、大木は口角泡を飛ばして議論したらしい[国民新聞 1892c]。

維新草創から顕職にあった大木にとって、いくらフランス思想に親しんだとしても、その地位はラディカリズムが許すはずがなかったのが自然であろう。伊沢らの批判は結局のところ、揚げ足取りに過ぎなかったのではあるまいか。しかし、大木の思想には、やはり教育勅語と帝国憲法を主軸として硬直化していく明治の国家体制には収まらない要素があったようにも考えられる。

おわりに

大木喬任における近代化と伝統の相克は、筆者が常に心に置きながら未だ結論が出ずにいる問題である。「漢学出身すと雖も、進歩主義の人にして、晩年に至つても<sup>かわ</sup>渝らず」とする評者もあるけれども[横山 1914: 31]、具体的例証は少なく、そもそも「進歩」とは明治人にとって何だったのか、またその時代を俎上にのせるわれわれにとっても何を意味するのか、考えるほどにどうもわからないでいる。

理由のひとつには、明治維新から20数年の間、大木自身の思想も変化を続けていたことがある。本稿中で触れた通り、明治初年は欧化主義に肩入れしていた大木が、10年代には儒教を重視するようになり、晩年には功利主義とも共鳴する『進行論』を書いた。いまだ関係資料の調査は十分でないので、これからも大木の思想傾向については、さまざまな発見があるかと思う。

ただ、本稿の収穫として、大木が明治期の官製イデオロギーと少なからず距離をおいていたことが、示し得たのではないだろうか。明治24年12月、伊東巳代治は伊藤博文に宛てた書翰で松方内閣の閣員に寸評をくわえたが、「何にせよ大木老爺杯か立憲大臣として内閣に在るなど本気の沙汰とは難被申」と書いている〔伊東1891〕。伊東が大木を老人扱いするのは、還暦間近の年齢もさることながら、フランス主義が時代遅れとされつつあったことを意味するのだろう。しかしその「老爺」の方が、のちに帝国憲法の「番人」として政界を圧迫する伊東よりも、よほど柔軟で幅の広い思想を持っていたように思われるのである。

〔投稿受理日2006.9.26／掲載決定日2006.11.30〕

#### 注

- (1) 『国家教育』創刊号に「国家教育の必要」を寄稿した『教育時論』記者田中登作も、欧米を模倣する教育政策の弊害に奮起して、あらたな国家主義教育を立てようとしたのが森有礼だったとしている。
- (2) 伊沢と大木の往来は一時途絶えたが、のちに大木が自邸を新築した際に二人は面会し、何事もなかったかのようにであったという。明治40年頃の講演で、伊沢は名文部大臣として大木、森有礼、井上毅をあげた。

#### 参考文献

- 伊沢修二. 1890. 「国家教育社設立の要旨」国家教育第1期1号.
- 伊沢修二. 1892. 「国家教育」国家教育第2期2号.
- 伊沢修二. 1901. 「伊沢修二殿談話筆記」『談話筆記：中巻』（国会図書館憲政資料室大木喬任文書書類の部69）所収.
- 伊東巳代治. 1891. 「伊藤博文宛伊東巳代治書翰」『伊藤博文関係文書：2巻』所収.
- 磯部四郎. 1901. 「磯部四郎殿談話拜聴筆記」『談話筆記：下巻』（国会図書館憲政資料室大木喬任文書書類の部69）所収.
- 井上久雄. 1987. 『歴代の文部大臣』広島修道大学総合研究所. iii+123pp.
- 大木喬任. 1881. 「乞定国体疏」『年譜考大木喬任』（島内嘉市著、アビアランス工房）所収.
- 大木喬任. 1885. 「深川亮三宛書翰下書」憲政資料室大木文書類の部28-10.
- 大木喬任. 1891. 「明治二十四年十二月二十日鹿鳴館ニ於ケル大木文部大臣ノ演説」『教育報知』297号.
- 大木喬任. 年不明. 「進行論」憲政資料室大木文書類の部47以下.
- 教育時論. 1892. 「再び新法典の実施を延期するの説」教育時論255号. 11-12pp.
- 尾崎三良. 1991. 『尾崎三良日記：中巻』中央公論社. 628pp.
- 街頭社編輯局. 1930. 『帝国議会舌戦史』街頭社. 358pp.
- 上沼八郎. 1986. 「『国家教育』と伊沢修二」『国家教育（復刻版）：別巻』所収. 11-61pp.
- 教育報知. 1891. 「大木伯と漢学」教育報知283号19pp.
- 経国. 1892. 「山田伯」『経国』7号.
- 国民教育奨励会. 1922. 『教育五十年史』民友社. 3+6+11+420pp.
- 国民新聞. 1892a. 「議會評論」『国民新聞』1892年5月27日.
- 国民新聞. 1892b. 「昨日の貴族院」『国民新聞』1892年5月29日.
- 国民新聞. 1892c. 「大木文部大臣と田中賢道氏」『国民新聞』1892年6月29日.
- 重松優. 2004. 「民法典論争の一研究」早稲田大学社会科学部研究科2003年度提出修士論文.
- 田中登作. 1890. 「国家教育の必要」『国家教育』1号.

- 田中不二麿. 1901. 「田中子爵（不二麿）閣下御談話筆記」『談話筆記：下巻』（国会図書館憲政資料室大木喬任文書書類の部69）所収.
- 手塚豊. 1948. 「『大日本教育会』の法典論（明治二十五年）」『明治民法史の研究（下）・手塚豊著作集：8巻』所収. 323-333.
- 内閣官報局. 『帝国議會貴族院議事速記録』（東京大学出版会より再版）.
- 中川洋子. 1985. 「明治期における『天』の概念……天賦人權の実証性と宗教性について」『竜谷史壇』通号86.
- 日本. 1892a. 「法典是耶非」『日本』1892年5月27-29日.
- 日本. 1892b. 「閣中の分裂」『日本』1892年5月27日.
- 日本. 1892c. 「天賦人權. 大木伯」『日本』1892年5月28日.
- 日本. 1892d. 「貴族院見聞録」『日本』1892年5月29日.
- 松本三之介. 1979. 「天賦人權論と天の概念」『家永三郎教授東京教育大学退官記念論集2：近代日本の国家と思想』（家永三郎教授東京教育大学退官記念論集刊行委員会編，三省堂）所収.
- 森一貫. 1976. 「天賦人權思想と『天』の概念」『阪大法学』通号97・98.
- 文部省内教育史編纂委員会. 1938. 『明治以降教育制度発達史：第3巻』龍吟社. 1106pp.
- 曲木如長. 1901. 「曲木如長殿談話筆記」『談話筆記：中巻』（国会図書館憲政資料室大木喬任文書書類の部69）所収.
- 箕作麟祥. 1892. 「山田顕義宛箕作麟祥書簡」『山田伯爵家文書』所収.
- 湯本武比古. 1912. 「今上天皇御幼時の御教育」『教育時論』985-992号.
- 湯本武比古. 1955. 『湯本武比古選集』信濃教育会.
- 横山達三. 1914. 『文部大臣を中心として評論せる日本教育之変遷』中興館書店. 7+6+9+384pp.